

財団だより

第109号

2006.3

多摩川



鮎鮎用の生簀桶 立川市教育委員会蔵

事業年報特集号



多摩川八景 その⑧

奥多摩湖

高さ約150m、総貯水量約1.8億 m^3 の水道用ダム「小河内ダム」は多摩川を堰きとめて出来た、周囲45kmの人工湖。1936(昭和11)年に着工後、第二次世界大戦で中絶、約20年後の1957(昭和32)年に完成した。945戸、約6,000人の小河内村は湖底に沈んだが、当時水道ダムとしては世界でも有数の規模で、今でも東京都の貴重な水源として人々の生活を支える。近くには、旧青梅街道のハイキングコース「むかしみち」、近代水道100周年と小河内ダム40周年を記念して建てられた水の博物館「奥多摩水と緑のふれあい館」、小河内村を偲ぶ「湖底の故郷」歌碑、ドラム缶で出来た全長220mの浮橋、この橋の袂にある首都用水の守り神「小河内神社」、ドラム缶橋を渡った対岸には「山のふるさと村」などがある。多数のアーチ橋が湖に架かっており、湖面に映えて美しいが、10,000本を超す桜が咲いた景色は圧巻である。

JR青梅線「奥多摩駅」から西東京バスで約20分の「奥多摩湖」下車。

Contents 目次

| | |
|-------------------------|----|
| 巻頭言 多摩川とソーシャル・キャピタル | 2 |
| 魚濫(らん)川お魚救出大作戦 | 3 |
| 里山の自然学校 | 4 |
| 3市(川崎・横浜・町田)の「緑と農の里めぐり」 | |
| 散策マップ | 5 |
| 高尾の森で植林活動 | 6 |
| 財団事業日誌 | 7 |
| 研究助成事業 | 9 |
| 助成研究ワークショップ | 13 |
| 主な環境関係財団の助成研究 | 14 |
| 多摩川関連の主な新聞記事 | 16 |
| 多摩川流域で活動しているNPO法人等 | 19 |
| 当財団の概要 | 20 |

多摩川とソーシャル・キャピタル



(財)統計研究会理事長
宮川 公男

私がここ2年ばかりの間、強い関心を持って研究しているテーマの一つはソーシャル・キャピタルである。ソーシャル・キャピタルというと、日本語では道路、港湾、上下水道、公園などハードな公共的施設を指す社会資本という言葉に結びつくが、そうではなく、社会の中で人々がつくるネットワークで醸成される信頼や規範のようなソフトなものであり、社会生活における潤滑油として人々の協調的行動を容易にするものと考えられる。

このソーシャル・キャピタルの概念は、古く1830年代にアメリカを訪れたフランス人貴族トクヴィルが、アメリカ人の間で地域社会におけるさまざまな市民的連帯活動がきわめて活発であることがアメリカに民主主義が根つき栄えている理由であるとしたことに端を発する。そしてそのような活動によって醸成されるソーシャル・キャピタルの豊かさが、かつては仲間と「いっしょにボウリング」をしていたアメリカ人の間に「ひとりでボウリング」をする人が増えていることに見られるように、減退の方向に向かっているのではないかと問題提起をしたのがハーヴァード大学のパットナム教授である。この議論は、現代社会におい

て民主主義をより良く機能させ、良い社会を実現させるためには何が必要かという問題から、新しい市民社会論に至るまで、大きな拡がりを見せている。

ここでわれわれの多摩川について考えてみると、流域の地域社会には多摩川を媒介にした多くの市民ネットワークの活動が活発に行われている。そして本財団の一般研究助成には毎回そのような市民ネットワークからの申請が多数寄せられ、助成を受けた研究の大部分はすぐれた成果を生み出している。

このような活動は、上述のようなパットナムの議論によれば多摩川流域社会におけるソーシャル・キャピタルの豊かさをもたらすのに大きな貢献をしているといえるのではないかと私は考える。一般に河川は、その持つ自然的景観の美しさや、さまざまな機能を通じて人々の中の連帯的市民活動を刺激する側面を持っている。多摩川も首都圏を貫流する最大の河川としてそのような役割をはたしているとすれば、本財団の貢献はそのような観点からも評価されなければならないと思う。

19世紀末から20世紀全般を通じて市場の失敗や政府の失敗を多く経験してきたことから、世界的に、市場と政府を補完する第三の部門として非営利組織(NPO)および非政府組織(NGO)の活動への期待が高まっている中で、ソーシャル・キャピタルの醸成に貢献する本財団の存在意義がますます大きくなっていくことを期待したい。

特別寄稿

「魚濫(らん)川お魚救出大作戦」



—護岸工事前に水生生物を
一時的に移動—

とどろき水辺の楽校 代表幹事
鈴木 眞智子

昨年、12月11日(日)とどろき水辺の楽校がフィールドとしている「魚濫川」(注)で「緊急お魚救出大作戦」が行われました。これは一昨年の台風被害による多摩川の護岸改修工事に伴う事業の一環として国土交通省京浜河川事務所が実施したものです。

通称「魚濫川」と呼ばれている水路は、幅2メートル、長さ約200メートルの小さな流れですが何箇所もの湧水があり、沢山の生き物達の棲家として居心地良い場所になっています。当然、人間の子供達にとっても格好の遊び場となっており、春から始まって冬枯れの時期まで手網を持った子ども達、釣りざおを手にした大人達にも場を提供しています。

その「魚濫川」が度重なる台風や、上流からの土砂の流入で底は泥が堆積し底なし沼状態、流れは濁み、本川への入り口や岸边にはごみが集まって腐臭さえ漂うほどになっていました。一昔前の「危険、汚い多摩川」に似通ってきていたのです。前回の1999年から2000年にかけての改修工事の時はまだ「とどろき水辺の楽校」も発足していなく、私は個人で「とどろき土手の桜を愛する会」に所属し植樹活動のお手伝いをしながら、工事の進捗状況を土手から眺めていましたが、大掛かりな工事に驚きはしていたものの、よもやその川に多様な生き物がいるということなど思いもよりませんでした。

しかし、2002年に「とどろき水辺の楽校」が産声を上げ、四季を通じて活動するようになると、多摩川本川は勿論のこと「魚濫川」は自然が造りだした豊かなビオトープであることを身をもって知ることになります。春は産卵のために鯉が群れをなして、競い合っ水しぶきを上げます。夏場のガサガサ探検では子ども達の網にオイカワ、モツゴ、ウグイ、ヨシノボリ、タモロコ、ギンブナそしてザリガニや、モクズガニ、シマドジョウ、ウナギなどが入ります。そして、石の底ではコオニヤンマ、ハグロトンボ、トビケラ、カワゲラ、そして人気のナミウズムシ(プラナリア)さえ

も見るすることができます。まさに「魚濫=魚があふれる」川そのものです。

工事の前に国土交通省京浜河川事務所から連絡があった時に一番の心配はそれらの生物の棲家や植物がなくなってしまうのではということでした。しかし、それは杞憂に終わりました。工程に「かいぼり」をして魚達を放流するということが組み込まれていました。早速、チラシを印刷して子ども達に参加を呼びかけました。

当日は師走の半ば、寒さと忙しきで参加者は少ないのではと思いましたが、赤ちゃんから幼児、中学生まで70数人の参加者が行政、多摩川河川漁業組合などの関係者の指導のもと、田植え用の靴に履き替え、水が掻きだされた川の中に入りました。入る入る、網はあっという間に満杯になります。泥を含んでいるので重い重い！子ども達は大人に手伝ってもらっての水槽移し替えです。水槽がいっぱいになる前にバケツリレーで放流。この繰り返しでした。工事中の護岸から事故があつてはと、「多摩川リバーシップの会」のメンバーがカメラで見回って下さると同時に、陸では当校のレスキュー訓練を受けた安全管理スタッフが、フル装備で見守っていました。一方、子供たちはといえば、寒さなんか、ものともせず、ドロンコになっても陸に上がろうとしません。昼食時には、岸边での釣り、川の中でのガサガサ、水中メガネによる川の底までの宝(魚?)探し、河川敷での春の野草てんぷら大会等々の計画まで飛び出し、楽しい企画に心躍らせました。

この川がこども達にとって「コブナつりしかの川」「ふるさとの川」なのです。春、カントウタンポポが「もういいよー」と告げてくれる日まで、川崎河口、横浜の海とフィールドを替えながらとどろき水辺の楽校はこの日の成果を待ちます。沢山の魚達と一緒に遊ぼうよと迎えてくれることを期待しながら。

(注) 魚濫川は等々力緑地付近の多摩川の川崎側河川敷を流れる全長200mほどの小川。昭和初期の砂利採取で出来た池と伏流水を水源に出来た川で、流れが緩やかで水も温かい為、水生生物の宝庫となっています。護岸工事に先立って実施された今回の水生生物の保護、移動は珍しい取り組みと言われています。



多摩川に学ぶ



里山の自然学校

NPO法人かわさき自然調査団

里山の自然学校事務局
水田ビオトープ班班長

岩田 臣生

「里山の自然学校」のおいたち

里山の自然学校は平成17年度に始めたばかりの事業である。

その前年、公園の児童プールのヤゴの救出を体験したり、子どもたちを公募して生田緑地の夜の昆虫観察会を開催したり、生田緑地で田んぼを再生し、稲を収穫したり、様々な子どもたちに体験させたいと思うことを私たちが体験する機会が多くあり、更に、かわさき自然調査団の活動拠点である青少年科学館の新館長から子ども向けの事業を計画してほしいという話があったことから、かわさき自然調査団にしかできない子どもを対象とした事業として企画した。

カリキュラム作成の留意点

特定の小学4～5年生を、年間通して相手にすることができるという状況を最大限に活かしたいと考えた。教育的視点から十分検討しようと、長年、市内の小学校の校長を歴任し、退官後、植物社会学の論文博士を取得した団員にこの学校の校長になってもらい、カリキュラムと我々講師側の指導をお願いした。また、四季の里山体験、田植えから脱穀までの米づくり、昆虫についての基本的なことを学習することの3本の軸を組み合わせた。

動機付けや工夫

かわさき自然調査団は20年以上にわたって川崎の自然を調査研究してきた団体である。プログラムによっては、その分野を専門とする団員に講師になってもらい、出会った生き物などについて専門的な話をしてもらった。子どもたちが、実際に動植物に触れて、五感を使って観察すること、納得するまで堪能させること、自分で考えることを基本とした。田植えや稲刈りでは基本的なことは教えたが、後は子どもたちにまかせた。ヤゴの救出作戦では、ヤゴに触れなかった子どもが友達の行動に刺激されて、いつの間にか触れるようになっていた。各回の内容の構成が様々であるため、各回で主役になる子どもも替わる。主役になれる機会をたくさん用意してやることも大事だと思った。

里山の自然学校を通して変わってきたこと

はじめのうち知識をひけらかせていた子どもが自然体験を通して素直に話を聞けるようになったり、触れなかった生き物を平気でつかめるようになったり、生き物を捕まえても観察したら逃がすということを当たり前のこととして行動するようになった。

子どもたちは皆、非常に個性的であり、毎回非常に楽しい時間を過ごさせてもらった。企画段階では子どもたちとどの様に接すればいいのか不安であったが、今では子どもたちと一緒に活動することを楽しめる様になった。大きく変わったのは私たちかも知れない。

<http://home.a03.itscom.net/nature23/satoyama.htm>



田植え



刈り取り



初夏の里山体験

多摩川散歩

■ 3市(川崎・横浜・町田)の「^{みどり}緑と農の^{みのり}里めぐり」散策マップができました ■

川崎市環境局緑政部緑政企画担当 鈴木 直仁

川崎市を代表する自然環境として多摩川がよく上げられますが、もう一つ貴重な自然的環境資源として市域に分布する多摩丘陵の存在は見逃すわけにはいきません。

川崎市は市街化区域が市域の88%となっていることから開発圧力が依然として強く、貴重な自然環境が年々消失しているのが現状となっております。

その開発などの対象となっている自然環境が多摩丘陵なのです。

こうしたことから、市では、特別緑地保全地区の指定を始めとした様々な緑地保全施策を講じながら限られた自然環境の保全を進めているところです。

こうした施策の一つに川崎市、横浜市、町田市による自治体の広域連携として「3市連携緑地保全会議」という会議を平成15年8月から発足させました。

これは、市域をまたがる多摩丘陵をそれぞれの自治体が連携し合い、保全への取組について共通の認識を持ちながら、丘陵地の連なりを保全していきたいという願いから立ち上げた3市の担当職員による研究会です。

その成果の一つが、今回ご紹介させていただきました手づくりの「緑と農の里めぐり」散策マップです。

これは広く市民の方々に3市にまたがる多摩丘陵の大切さを地域ぐるみで発信していくことを目的として作成いたしました。マップの作成にあたっては、地元の和光大学や和光大学附属高校の美術クラブにもご協力いただき、地域資源のご紹介や挿絵を寄せていただくなど様々な点でお世話になりました。

ここで、マップの概要をご紹介しますと、コースの起点は、小田急線「鶴川駅」若しくは川崎市麻生区虹ヶ丘3丁目の「虹ヶ丘小学校バス停」(もより駅:東急田園都市線あざみ野駅)であり、約6km(約2時間30分程度)のコースとなっております。

コースは、3市の里地景観が楽しめる内容となっており、川崎市麻生区岡上地区⇄町田市三輪地区⇄横浜市青葉区寺家地区⇄川崎市麻生区早野地区により構成されております。

また、同エリアには横穴古墳群などの遺跡や高蔵寺を始めとした由緒ある寺社仏閣が多く点在しており、多摩丘陵の自然をはじめ、地域文化や歴史をめぐる興味ある内容となっております。

更に季節ごとに違った顔を見せてくれる里地里山の風景は、草花や野鳥の観察などにもうってつけで、改めて多摩丘陵の素晴らしさを再発見することとなるでしょう。是非、お仲間とお誘いの上、まずは早春の多摩丘陵の自然を満喫しながら、散策してみたいはいかがでしょうか。

●マップの問い合わせ先

川崎市環境局緑政部緑政課緑地保全班
TEL 044-200-2381



私と多摩川



高尾の森で植林活動

日本山岳会自然保護委員会 委員
高尾の森づくりの会代表

河西 瑛一郎

「玲瓏の水百萬の、民の命をつなぐ源、流れて息まぬ多摩川の・・・」母校都立立川高校の校歌である。高校時代は学校のすぐ近くを流れる多摩川の川原を毎日走ったものだった。多摩川と私の今までを思い出してみるとその縁の深いのに驚く。小学校から結婚するまでの間住んだ三鷹の家の裏には玉川上水が勢い良く流れていた。今生活している日野は多摩川と浅川に挟まれた大地の上にある。そして5年前から始めた裏高尾における森づくり活動は浅川の源流になっている場所だ。私たちの手がけている森から出る一滴一滴の雫が、多摩川の流れの一部になっていると思うと作業にも力が入る。

中学時代から山に登りだし、高校・大学と山岳部に入り年間かなりの日数を山で過ごした。その当時から入っていた日本山岳会の仲間と5年前に「高尾の森づくりの会」を立ち上げた。目的は沢山の思い出を作ってくれた山々に何かお返しをしたいと言ったものだった。ちょうどその頃から国有林に民間ボランティアを入れ、広く日本の森林が抱える問題を理解してもらおうと林野庁の方針が変わってきた。関東平野の西にある国有林を何箇所か歩き回り最終的に浅川上流の木下沢地区にある国有林約180ヘクタールをフィールドに選んだ。

国土緑化推進機構の応援も戴き始めることになったが、当初は作業参加者が20人から30人と言った規模だった。現在は毎月の定例作業日に100人位の人が集まり年間の参加者は2000人に近い。作業現場は山岳会が主催する会なので、里山を捨てあえて山中の急斜

面に挑んでいる。現在会員は210人、その3分の1が山岳会の会員。会員の中には電源開発株式会社の中垣社長や農水省の石原事務次官もいらっしやる。この森は杉・檜の人工林が殆どであるが、ここ20年くらい人の手が入っていない状況だ。こんなところを舞台に作業道を作り、藪を切り開き、弦を切り、除伐間伐を行い、広葉樹を植樹し、高尾の風景にふさわしい針広混交林（針葉樹と広葉樹が適度に入り混じった美しい森）を作るべく汗を流している。今年3月で最初の5ヵ年計画が終了し、新年度からは第2次5ヵ年計画に入る。全体的には大まかに作った50年計画をベースに100年間継続しようと考えている。今までの実績が認められたのか、新しい年度からは我々の作業が国の作業計画に取り入れられることになった。これは全国の森林ボランティア団体では初めての事だという。

森林作業だけではなく将来の後継者作りに京王電鉄の応援を得て子供キャンプを行ったり、自然観察会を開いたり、炭焼きなども行い森に関する知識を多面的に体験できる組織にしたいと思っている。会員の多くは既にリタイヤーしているが、酒を飲みながら50年100年先を楽しみにして議論する様はなかなか他の場所では得られないものだ。「森づくりは人づくり・我々が森を育てているのではない。森に我々が育てられているのだ」と言うことを実感する瞬間である。(活動に興味のある方は <http://jactakao.net/> にアクセスして下さい)



高尾山・作業地から立川方面を眺める

財団事業年報特集

1 事業日誌（2005年1月～2005年12月）

- 1月16日 平成17年度助成研究の公募締め切り（応募件数57件）
- 1月24日 第359回常任理事会を午前10時から渋谷南平台東急本社で開催
－第49回理事会、第45回評議員会開催について ほか
- 2月23日 第360回常任理事会を午後3時30分から南平台東急本社で開催
－第47回定時選考委員会開催について ほか
- 3月1日 財団だより“多摩川”第105号（事業年報特集号）発行
－特別寄稿「都市に“春の小川”を」（東京農工大・千賀裕太郎教授）
－巻頭言「多摩川の上流にて」（たましん地域文化財団・中澤富士男副館長）
- 3月10日 第47回定時選考委員会を午後1時より、渋谷地下鉄ビル内会議室で、選考委員9名出席のもと開催
－新規研究10件（学術研究6件、一般研究4件）、継続研究11件（学術研究6件、一般研究5件）をそれぞれ採択
- 3月23日 第45回評議員会を午前10時より南平台東急本社にて開催
第49回理事会を午前11時より南平台東急本社にて開催
－平成17年度事業計画、収支予算の承認 ほか
- 3月29日 第361回常任理事会を午前10時より、南平台東急本社にて開催
－第19回多摩源流まつりへの協力について ほか
- 4月25日 第362回常任理事会を午後2時から南平台東急本社で開催
－第50回理事会、第46回評議員会議案について ほか
- 5月4日 小菅村主催「第19回多摩源流まつり」を後援
- 5月6日 「特定研究」の現地（あきるの市樽沢）を研究チームと事務局で視察、踏査
- 5月8日 （財）世田谷区スポーツ振興財団主催「第6回多摩川ウォーク」に協賛
- 5月23日 第46回評議員会を午後1時30分より南平台東急本社にて開催
第50回理事会を午後2時30分より南平台東急本社にて開催
－平成16年度事業報告、収支決算の承認、理事・監事・評議員並びに選考委員の選任
－第47回定時選考委員会採択研究の承認 ほか
- 6月1日 財団だより“多摩川”第106号発行
－特別寄稿「GIS（地理情報システム）的なものの考え方とは」（NPO法人地域自然情報ネットワーク・原 雄一理事）
－巻頭言「きれいな水は自然の原点」（せたがやトラスト協会・秋山光男理事長）
- 6月3日 日本水大賞委員会より「第7回水大賞・厚生労働大臣賞」を受賞（清水会長が出席於：国連大学国際会議場）
- 6月1日 環境学習副読本「多摩川へいこう」（内容を10年ぶりに改訂）を10,000部増刷し、多摩川流域の小学校67校に7,736部並びに東急沿線生活情報誌「SALUS」（東急電鉄発行）
～ 読者に740部を贈呈
- 7月31日 読者に740部を贈呈
- 6月28日 第363回常任理事会を午前10時30分から南平台東急本社で開催
－平成17年度助成金贈呈式について ほか

- 7月 1日 研究助成成果報告書発行 (CD-ROM・研究概要小冊子添付)
学術研究第33巻 (9件収録)、一般研究第26巻 (8件収録) を各々制作し、多摩川流域の図書館、教育委員会、国会図書館、首都圏の主な大学図書館等 200 施設へ贈呈
- 7月 11日 平成 17 年度助成金贈呈式を正午より、渋谷東急インで開催
—学術研究者 6 名、一般研究 4 名並びに理事・評議員・選考委員など約 30 名が出席
式の冒頭、新たに評議員に就任した藤嶋 昭先生が講話
- 7月 26日 第 364 回常任理事会を午前 10 時 30 分から南平台東急本社で開催
—「調査・試験研究選定の基準等の規程の改正」について ほか
- 7月 29日 第 11 回助成研究ワークショップ「生物多様性と外来種の問題—多摩川からの報告—」を
午後 1 時より青山の国連大学会議場で開催
(コメンテーター：樋口広芳 東京大学大学院教授、参加者 78 名)
- 9月 1日 財団だより“多摩川”第 107 号発行
—特別寄稿「雨水は天水、ともに生きる工夫を」(NPO 法人グリーンネックレス理事 黒岩哲彦)
—巻頭言「温暖化対策と持続可能な社会」(環境新聞編集部・工藤真一課長)
- 9月 1日 (社)国土緑化推進機構「緑と水の森林基金」から平成 18 年度の助成が承認
- 9月 1日 平成 18 年度助成研究公募開始 (締め切りは平成 18 年 1 月 16 日)
- 9月 16日 千葉大学大学院医学研究院主催 出前講義「水の生命科学」を後援 (会場：東京都立富士森高校<八王子>理科教室)
- 9月 17日 千葉大学大学院医学研究院主催 市民講座「水と緑の生命科学とわたくしたちの健康に関わる学習会」を後援 (会場：八王子市「あったかホール」内・環境学習室)
- 9月 27日 LTER (長期生態研究) プロジェクト・東京農工大学農学部附属 FM 多摩丘陵地 (東京都八王子市堀之内：12ha) をプロジェクトチームメンバーと事務局で視察、踏査、併せて進捗状況を把握
- 9月 29日 第 365 回常任理事会を午後 4 時から南平台東急本社で開催
—募集要項の改訂も含めた、平成 18 年度の助成研究の公募について ほか
- 10月 24日 第 366 回常任理事会を午前 10 時から南平台東急本社で開催
—上半期決算、下半期収支見直し及び平成 17 年度決算予想について ほか
- 11月 5日 千葉大学総合安全衛生管理機構・大学院医学研究院主催市民講座
「環境水から考える化学物質検査の現状と健康影響評価」を後援
(会場：千葉大学けやき会館)
- 11月 11日 多摩川中流域 (羽村取水堰から永田橋まで) の「生態系復元プロジェクト」の現地視察、踏査—理事・評議員 (代理含む)、選考委員、助成研究者他 11 名で実施
- 11月 15日 (財)せたがやトラスト協会主催「せたがやトラストウィーク 2005」を後援
～ 20日
- 11月 23日 (財)世田谷区スポーツ振興財団主催「第 5 回多摩川流域少年サッカー大会」に協賛
- 11月 28日 第 367 回常任理事会を午後 2 時 30 分から南平台東急本社で開催
—資産運用の改善について (報告) ほか
- 12月 1日 財団だより“多摩川”第 108 号発行
—特別寄稿「礫河原再生の取り組み」(東京農工大・星野義延助教授)
—巻頭言「拡がるナショナル・トラスト運動」
(日本ナショナルトラスト協会・木原啓吉名誉会長)
- 12月 20日 第 368 回常任理事会を午後 2 時 30 分から南平台東急本社で開催
—経済産業省技術環境局の業務及び財産状況の検査について (報告) ほか

2 研究助成事業

当財団では、平成 17 年度研究助成金贈呈式を、7 月 11 日(月)、渋谷の東急インで開催し、平成 17 年 4 月を開始月とする新規の助成研究 10 件に助成金を贈呈致しました。継続研究 11 件も承認されていますので、平成 17 年度は 21 件を助成していることになります。ここに全助成研究をご紹介します。(継続研究および 7 月に CD-ROM と概要小冊子が完成し配布、贈呈された研究については課題と研究者名のみ掲載)

<新規助成研究>

学術研究

多摩川河川水に含まれる内分泌攪乱物質の水生植物による吸収・分解機構に関する研究



池田 駿介 (いけだ しゅんすけ)
東京工業大学大学院 理工学研究科 教授
共同研究者
浦瀬 太郎 東京工業大学大学院 理工学研究科 助教授
大澤 和敏 東京工業大学大学院 理工学研究科 助手
赤松 良久 東京工業大学大学院 総合理工学研究科
日本学術振興会特別研究員

本研究の対象とする河川水の内分泌攪乱物質汚染は、近年、都市河川水質問題の中核をなしており、その浄化機構の解明および対処法の確立は国や各自治体などで早急に求められている項目である。しかしながら、現況汚染調査や生物への影響調査のみに留まっており、その浄化機構を定量的に示した研究事例は非常に少ない。特に、高濃度の内分泌攪乱物質が顕著に検出されている多摩川においては、水生植物による吸収・分解機構を定量的に評価し、具体的な対策法を提言する必要性が高い。本研究は、水生植物による内分泌攪乱物質の浄化機構について、これらの植生を有する流れ場における物質輸送現象、水生植物の物質吸収・分解機構を統合して取り扱うところに大きな特色がある。本研究の結果、水生植物による内分泌攪乱物質の浄化機構が植物生理や水理構造の観点から合理的に解明されることが期待され、河川における水生植物の適切な管理方法の学術的基礎を与えることが可能となる。本研究を通じて、環境浄化の取り組みに寄与したい。

多摩川河口干潟における硝化・脱窒に関する研究



浦川 秀敏 (うらかわ ひでとし)
東京大学海洋研究所
先端海洋システム研究センター 助教授
共同研究者
杉浦 琴 学術研究支援研究員
小池 勲夫 東京大学海洋研究所 教授(前所長)

干潟は浄化能力が高いとされ、陸域から供給される有機物や栄養塩の除去の場として重要である。本申請では、多摩川河口干潟がもつ環境浄化能力の評価のため干潟の窒素除去能力に注目して研究を行う。まず潮汐の変化と堆積物表層の硝酸濃度の関係について検討し、脱窒速度の見積もりを潜在的な脱窒速度と現場の脱窒速度とに分けて行い、多摩川泥質部と河岸近くの砂質部における底質による脱窒活性の違いを明らかにする。また多摩川河口干潟の窒素循環や有機物分解に寄与するさまざまな微生物群集を、分子生態学的アプローチを用いて解析し、その多様性、分布パターン、現存量について最新の手法を用いて明らかにし、微生物活性のデータと照合することでプロセス全

体の解明を目指す。さらに、得られた窒素収支の見積もりから、東京湾の窒素循環への多摩川河口干潟の寄与を評価する。

多摩川流域における窒素循環の把握および地目連鎖による浄化能の解析



木村 園子ドロテア
(きむら そのこどろてあ)
東京農工大学大学院 共生科学技術研究部 助手
共同研究者
岡崎 正規 東京農工大学 教授
豊田 剛己 東京農工大学 助教授
本林 隆 東京農工大学 助手
楊 宗興 東京農工大学 助教授
小口 高 東京大学 助教授

近年、人間活動により生態系における反応性窒素(化学的・物理的・生物的反応に関与する窒素)が増加しており、その適正な管理が緊急な課題となっている。反応性窒素を最適化するためには不確実性が高い脱窒量の定量化が不可欠である。脱窒のメカニズムについては解明が進みつつあるが、実際の生態系において脱窒により大気圏に放出されている窒素量は不明である。本研究では多摩川流域の現状を見積もり、支流ごとで比較することにより、全流域の特徴を明らかにすることを目標とする。それによって、負荷量とその行方について定量的に把握し、脱窒量を推定する。

多摩川全域の窒素循環の概要をつかむことと平行して、多摩川流域域内にある大栗川の小支流水源部について、地形と土地利用、微気象の関係を解析する。また、同じく多摩川流域域内で行う水田の水質浄化機能の定量結果を支流の解析結果に当てはめ、土地利用の連鎖によってどの程度の環境負荷の軽減が図れるかを解析する。それによって流域における土地利用のあり方について提言する。

粒状有機物から見た多摩川の生態学的連続性の評価



古米 弘明 (ふるまい ひろあき)
東京大学大学院 工学系研究科 教授
共同研究者
中島 典之 東京大学大学院 講師
加賀谷 隆 東京大学大学院 助手
吉村 千洋 東京大学大学院 研究員

河川縦断方向の連続性が確保されることにより、有機物や無機成分の下流方向への供給、水生昆虫のドリフトや魚類の遡上などが可能となり多様な種が維持されている。また、縦断方向の餌資源の質的变化やそれに伴う生物群集の遷移が河川生態系を特徴付ける。都市河川である多摩川の中流部から河口域にかけては、処理水の流入だけでなく、河川構造物の存在に伴い

水生動物の移動制限や餌資源としての粒状有機物の不連続な変化が存在して、生物群集構造に大きな影響を与えていると考えられる。

本研究では、粒状態の有機物に着目して、それを水生生物の餌資源という観点から調査することにより、河川縦断方向の生態学的連続性を評価することを目的とする。すでに、洪水後における堆積性の微細粒状有機物と底生動物群集の対応関係への処理水の影響を調査してきている。これらの知見を踏まえ、流量安定期にも粒状有機物と底生動物群集を集中的な調査することにより、さまざまな粒径の有機物の生化学的特性が縦断方向にどのように変化しているかを解明し、さらに底生動物群集と微生物群集への影響を検討する。

多摩川の植生と植生図 — 30年間の変化



中村 幸人 (なかむら ゆきと)

東京農業大学 森林総合科学科 教授

共同研究者

武生 雅明 東京農業大学 講師

菅原 泉 東京農業大学 講師

今井 伸夫 東京農業大学 大学院博士課程2年

高橋 克明 東京農業大学 大学院修士課程1年

地域の自然環境を評価する有効な手段のひとつに、植生など自然の属性の質と量の経年変化を調べる方法があります。これは植生の現況を評価するだけでは見えてこない部分、過去から現在への時間軸で、自然環境の何がどのように変わったのかを、具体的に捉えることができ、また将来への予測に繋げることができます。そのためには過去に比較できる研究資料が残されていること、また、過去と同じ方法を用いて現況調査を行ない、解析する必要があります。本研究では30年前に行なわれた「多摩川流域の植生と植生図」と同じ地域で、同じ調査方法を用いて植生調査と植生図化(縮尺1:50,000)を行ないます。その結果、多摩川流域の過去30年間の自然環境の質と量の変化を植生の側から正確に読み取ることができます。また、新たに流域の景観を、生態系を機軸とした植生群の広がりとして単位化し、地域的な比較を行うことを考えています。研究成果は現況の評価と植生景観の保全に反映させることができます。

多摩川源流・鶴川地域の伝統的畑作農耕をめぐる生物文化多様性の保全



木俣 美樹男 (きまた みきお)

東京学芸大学大学院 教育学研究科 教授

共同研究者

増田 昭子 立教大学 講師

井上 典昭 都留文科大学附属高校 教諭

井村 礼恵 東京農工大学大学院 博士課程院生

石川 裕子 京都大学大学院 博士課程院生

日本の畑作は縄文時代以来の歴史があり、多摩川流域の農山村では多様な穀物、いも、まめ、野菜などが長い伝統を受け継ぎ栽培されてきました。これらの栽培植物は、ふきやわさびを例外として、ほとんどが海外で栽培化され、日本へと伝播してきたものですが、多摩川流域の環境に次第に適応して、地域固有の畑作物在来品種と栽培技術を生み出し、さらに祭祀や季節の行事にも結びつき、生物文化多様性を豊かにして伝統的智恵

として蓄積、体系化されてきました。ところが、この半世紀は地域の伝統的農耕文化が衰退へと向かう最大の危機をもたらしました。現代の科学的知識体系が伝統的智恵体系を遅れた役に立たないものとして否定しましたので、地域固有の文化は衰退し、生物文化多様性も遺伝侵食を受けて絶滅の危機に瀕しています。私たちは多摩川源流域の畑作農耕の現状を民族植物学の調査研究によって把握し、伝統的知恵体系を再評価することにより、生物文化多様性を保全し、農山村社会を持続可能に導く一方策を提案したいと考えています。

一般研究

東京都下多摩川水系およびその流域における昆虫相と分布の変遷 (I)



須田 孫七 (すだ まごいち)

東京大学総合研究博物館 協力研究員

共同研究者

須田 研司 国立科学博物館付属自然教育 昆虫調査員

須田 和美 主婦

山崎 誠 永代エンジニアリング 社員

横田 千佳 東京大学総合博物館 昆虫標本室

須田 真一 東京大学大学院 保全生態研究室

石井 雅幸 千代田区立九段小学校 教諭

鈴木 斉 世田谷区立松沢中学校 教諭

環境評価の方法として大気汚染、水質汚染、気象変化等の調査・経年変化等の研究があるが昆虫類の生息状況調査(種類・発生期・分布・経年変化)は大きな意味を持つ重要な調査研究といえる。過去において多摩川水系流域の昆虫調査は特定地域、特定昆虫群については断片的に実施され水生昆虫群・チョウ群のみ多摩川水系全域の研究が報告されている。須田の組織する東京の昆虫研究プロジェクトは以前より東京の昆虫相解明の一環として明治以降現在までの昆虫文献約6千点を渉猟し約28万点の東京生息種を確認してきた。その半数は多摩川水系の記録であって残りは荒川水系及び島嶼の記録である。

今回の助成によりこの膨大な資料を解析し情報不足地域は実態調査、標本調査を実施し既存資料に加えデータベース化し多摩川水系及びその流域、多摩川の昆虫相を論じるのに必要とする地域も含めた昆虫相の集大成としたい。

地域通貨を用いた多摩川源流域における環境機能の向上に関する研究



吉田 徳久 (よしだ とくひさ)

早稲田大学 環境総合研究センター 教授

共同研究者

永田 勝也 早稲田大学 理工学部 教授

寄本 勝美 早稲田大学 政治経済学部 教授

西浜 譲二 早稲田大学 環境総合研究センター 客員研究員

永井 裕二 早稲田大学 環境総合研究センター 客員研究員

青柳 諭 小菅村 振興課長

本調査は、「首都圏の諸活動の大きな基盤である多摩川源流域の自立的な自然再生を果たすため」に、形成されるべき上下流域間相互協力のあり方をアンケート調査によって明らかにした上、上下流域間の協力の橋渡し手段として地域通貨「源

流通貨（仮称）」を実験的に導入し、その効果を検証することを目的とするものである。

具体的には、村内でこれまで先行的に進められてきた森の産物（林産品製造、廃棄物循環利用、自然エネルギーの開発可能性）の提供と、街からの奉仕（ボランティアによる森林間伐・植林事業、森林保全基金造成など）の決済を、地域通貨流通の基本動機とし、多摩川の上流と下流の不特定多数の市民・NPO・企業等の間に“環境保全意識を介した連帯と相互扶助のネットワークを醸成する”ことを目指す。

本調査で設計される源流通貨のシステムが、今後の多摩川上流地域・下流地域の環境保全ネットワークの形成・強化の大きな原動力になって欲しいと願っている。

近世・多摩川における河川氾濫と下流域農村に関する歴史人口学的分析

— 平川家文書からみた荏原郡・六郷領・下丸子村 —



林 和光（はやし かずみつ）

財団法人 道路交通情報通信システムセンター 次長

多摩川下流域農村の一つである下丸子村は従来、典型的な近世農村としてその安定的な歴史が説明されてきた。しかし近世中期以降に展開された新田開発と水防の強化はかつて洪水氾濫を許容していた旧蛇行部や荒蕪地を消滅させ、むしろ相対的に水害を激化させていた。この水害頻度の上昇は農地の壊滅を直接的にもたらしたばかりか、加えての復旧工事への農民負担増は、重大な影響を与えたはずである。そこで本研究では歴史人口学的アプローチや計量経済史分析を用い、「多摩川と共に生きる」とは如何なることかを問う地域史を叙述する。具体的には「平川家文書」を基に多摩川河川氾濫による耕地の失地等と経済状況との因果関係を定量化し、最終的にそれらが世帯構造や婚姻年齢や出生率・死亡率の変化等の人口学的指標にどのようにフィードバックされたかを評価することを目的とする。

多摩川流域の考古学的遺跡の成立と古環境復元



比田井 民子（ひだい たみこ）

東京都埋蔵文化財センター 課長補佐
共同研究者

伊藤 健 東京都埋蔵文化財センター 主任調査研究員

西井 幸雄 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 統括調査員

野口 淳 明治大学 校地内遺跡調査団 調査研究員

平井 義敏 明治大学 校地内遺跡調査団 調査研究員

辻本 崇夫 (株)パリオ・サーヴェイ 研究センター長

古多摩川により形成された武蔵野台地のなかには旧石器時代から中世に至るまでの考古学的遺跡が数多く残されている。現在では首都東京を中心とする市街地化した地域によりその大半が占められているが、古来から残された数多くの考古学的遺跡から古多摩川による武蔵野台地が如何に立地上の好条件に恵まれた地域であったことが推察されるのである。

その主たる要因は豊かな湧水と台地の奥部まで入り組んだ中小河川があったことが関わっていることを2000年の研究報告「多摩川流域の段丘形成と考古学的遺跡の立地環境」で明らかにし

てきた。この成果に基づいてこのたびの研究では遺跡が残される地点或いは地域において沼沢地や自然堤防、河川の氾濫原があった可能性があることが指摘されることから、遺跡個々の地形、植物遺体、離水時期等の古環境復元をおこない、歴史的に多摩川を廻る環境がその初期から人の生活とどのように関わってきたかを明らかにしていきたい。

< 継続助成研究 >

学術研究

多摩川水系における落葉食河川底生動物の種多様性に及ぼす河川環境要因の影響解析

加賀谷 隆（かがや たかし）

東京大学 農学部 助手

多摩川における生態系多様性の評価：寄生虫を指標とし、地理情報システムを活用した方法の開発

杉山 広（すぎやま ひろむ）

国立感染症研究所 寄生動物部 主任研究員

多摩川水系に侵入した外来動物『フロリダ（マミズ）ヨコエビ』の分布・拡散の現状と生態系への影響予測

倉西 良一（くらにし りょういち）

千葉県立中央博物館 生態環境研究部 上席研究員

多摩川中流域における河川敷植生の復元と管理についての研究

一澤 麻子（いちさわ あさこ）

横浜植生研究会 会員

多摩川における早瀬の景観的特徴とその水理環境に関する研究

知花 武佳（ちばな たけよし）

東京大学大学院 工学系研究科 講師

多摩川水系飲用水に関する市民コーディネーター育成アカデミーの設立：生物作用水質モニターと水のヒト生命科学教育システムの構築

鈴木 信夫（すずき のぶお）

千葉大学大学院 教授

一般研究

中央線沿線地域の雨水循環的活用可能性研究調査

黒岩 哲彦（くろいわ あきひこ）

NPO法人 グリーンネックレス 理事

東京都の湧水等に出現する地下水生生物の調査

篠田 授樹（しのだ さつき）

地域自然財産研究所 代表

多摩川中流のかつての田園地域における希少植物の生育確認調査

星野 順子（ほしの じゅんこ）

府中の植物を記録する会 世話人

多摩川中流域の水環境を題材としたプログラム開発と市民による学校支援体制システムの研究

杉山 典子 (すぎやま のりこ)

調布市環境学習サポーター

多摩川における地区河川環境モニタリング手法とその運用に係る人材育成に関する研究

横山 十四男 (よこやま としお)

多摩川流域リバーミュージアム検討協議会 代表

一研究助成成果報告書収録の研究一

学術研究第33巻9件および一般研究第26巻8件の研究助成成果報告書(CD-ROM・研究概要小冊子添付)が完成し、7月15日から多摩川流域の図書館や教育委員会、国会図書館、首都圏の主な大学図書館等に贈呈いたしましたので、併せて各巻収録の課題と研究者名をご紹介します。

学術研究

多摩川中、下流域における縄文時代以降の環境変遷と現環境の成立に関わる研究

杉原 重夫 (すぎはら しげお)

明治大学 文学部 教授

多摩川上流丹波川流域における河川水質形成に及ぼす雪の効果

鈴木 啓助 (すずき けいすけ)

信州大学 理学部 助教授

多摩川流域における明治前期の植生図化と植生景観の変遷

原田 洋 (はらだ ひろし)

横浜国立大学 教育人間科学部 教授

多摩川流域の丘陵地における物質動態と環境保全システムの構築

三原 真智人 (みはら まちと)

東京農業大学 地域環境科学部 生産環境工学科 助教授

多摩川河川敷の植生遷移における生存戦略としてのアレロパシーの関与

渡邊 泉 (わたなべ いずみ)

東京農工大学 農学部 助手

多摩川中上流域におけるシカによる植生の破壊と土壌浸食についての調査

高槻 成紀 (たかつき せいき)

東京大学 総合研究博物館 助教授

多摩川河口域の干潟における底生動物相の解明と人為的影響の評価ー環境浄化に貢献する底生動物の釣り餌としての採捕について

西 栄二郎 (にし えいじろう)

横浜国立大学 教育人間科学部 助教授

多摩川水系飲用水の生物作用の調査：遺伝子情報の不安定化と免疫機能の攪乱に関する水質検査

喜多 和子 (きた かずこ)

千葉大学大学院 医学研究院 講師

多摩川に接続する農業水路の魚類の生息状況とそれを規定する要因について

千賀 裕太郎 (せんが ゆうたろう)

東京農工大学 農学部 地域生産システム学科 教授

一般研究

檜原村三頭山「都民の森」公園の施設利用状況調査と自然公園の適正利用に関する研究

青木 賢人 (あおき たつと)

金沢大学 文学部 地理学教室 助教授

多摩丘陵に棲息する生き物のくらしに学ぶ環境教育教材の研究開発

品田 穰 (しなだ ゆたか)

多摩生きもの学習研究会 会長

多摩川をめぐる住民運動史に関する調査研究

守田 優 (もりた まさる)

流域の水循環型社会をすすめる会 役員

多摩川日野用水堰周辺環境整備後の遷移調査

坂本 幸尚 (ほさか ゆきひさ)

東京都 環境局 都市地球環境部

南浅川流域のヒガシカワトンボ生活史にみられる気候温暖化の影響

田口 正男 (たぐち まさお)

神奈川県立弥栄高等学校 教諭

多摩川二ヶ領用水から取水した水田における稲の成育に関する生理生態学的研究

安藤 秀俊 (あんどう ひでとし)

川崎市立中野島中学校 教諭

二ヶ領用水取入口に関する史的考察

赤澤 寛 (あかざわ ひろし)

元 川崎市水道局 理事

多摩川河岸を汚染するプラスチック・ゴミ調査主にレジンペレットの起源とその影響について

山本 洋司 (やまもと ようじ)

東京大学大学院 農学生命科学研究科 助手

3 第11回助成研究ワークショップ

時宜を得た題材を取上げ、発表者と参加者が一緒になって勉強する機会として、本年も7月29日に、11回目となるワークショップを開催いたしました。お申し込みは多数ございましたが、会場の関係で100名の方にお返事を差上げ、最終的には78名のご参加を得ての開催でした。

最初に、水生昆虫・昆虫分類学のご専門の倉西良一氏から、「外来種ハンドブックにも出ていない種のフロリダヤマミズヨコエビは、'89年に千葉で見つかったのが国内での最初の発見であり、'97年ころから多摩川にも出現したが、今では拝島橋～二子玉川に広く分布し、三沢川など支流の奥深くでもみられるようになった。これを食べるものがそれまで食べていたものを止めてしまうことによる個体数の変動が生態系への影響をもたらすことは容易に予想されるが、魚類との関係、汽水域への適応状況なども含め、まだよく分かっていないことが多い。神奈川県調査では、県内全河川へ分布したとの報告もあり、汚れた水や高水温に強く、高密度に生息するこのエビの監視、研究は引続き重要である。」との解説がありました。

続いて、川池芽美さんから、「多摩川上流域では、森林の乱伐による水害に対する治水策として、また乱伐による崩壊地の復旧などを目的に適応性の高いニセアカシアが、その昔導入された。この導入時期からは大分タイムラグがあって、'80年代に入ってから多摩川の河原でニセアカシアの繁殖が見られるようになった。これにより、河原の固有植物が追いやられ生態系が壊されつつあること、偏った川の流れが生まれそれ

が堤防を掘り進むなど治水上の問題も生じつつあること」などが報告され、また、「予防、撲滅、制御に止まらず、生態系本来のプロセスの復元をも視野に入れて外来種の問題に取り組むことの必要性が世界レベルでも認識され始めており、多摩川でも失われてしまった河川の持つ自然のダイナミズムを取戻す（復元）ことが何よりも望まれる。」との解説がありました。

次に、桑原和之氏から、「干潟が大きく減少していることもあって、多摩川河口域を含む東京湾では、シギ・チドリ類やサギ類の個体数が減少し、ガン（マガン、サカツラガン）類が消滅するなど、個体数の減少と種構成の単調化が顕著になっている。渡り鳥を含めた野鳥の減少は河口域の生態系のバランスを崩す一因であり、厳密な外来種問題とは関係ないものの、渡り鳥の保護も大事なことで、希少種などを個別に保護するよりは、飛来地全体を指定し保護することが望ましく、ラムサール条約の条件を満たしている多摩川河口域を同条約に登録することが望まれる。」と解説されました。

最後に、樋口広芳教授が、「研究者がコツコツやっけていくなことが分かってきているが、外来種問題を始めとして、まだまだ実態は掴めていない。多摩川の身近な自然でも、モニタリングが不十分。それを補うには、子供を含めた市民による調査が良い手段であると思う。多摩川は我々に身近な存在であり、自然と人の暮らしを良くしていく中で、“自然と人の共生”を考えていくには良い場所である。市民皆で参考となる事例を積み上げて行って貰いたい。」と総括されました。

テーマ：「生物多様性と外来種の問題 — 多摩川からの報告」

| | | | |
|-------|-------|--|----------------|
| 13:00 | 開会挨拶 | とうきゅう環境浄化財団 理事長 | 五島 哲 |
| 13:05 | 報告1 | 「多摩川水系に侵入した外来動物フロリダヨコエビの分布・拡散の現状と生態系への影響」 2004年～2006年助成 千葉県立中央博物館 上席研究員 | 倉西 良一 |
| 13:25 | 報告2 | 「多摩川河川敷におけるニセアカシアの分布拡大と生育環境に関する調査研究」 1999年～2001年助成 (財)日本生態系協会 研究員 | 川池 芽美 |
| 13:45 | 報告3 | 「多摩川河口域における水鳥相の解析—特に東京湾の干潟環境との対応について」 1995年～1998年助成 千葉県立中央博物館 学芸研究員 | 桑原 和之 |
| 14:05 | コメント | コメンテーター 東京大学大学院 農学生命科学研究科 教授 | 樋口 広芳 |
| 14:15 | 休憩 | (15分) | |
| 14:30 | 総合討論会 | コメンテーター 東京大学大学院 農学生命科学研究科 教授 コーディネーター とうきゅう環境浄化財団 常務理事 | 樋口 広芳 長井 弘道 |
| 16:00 | 閉会 | | |

4 主な環境関係財団による河川、湧水、水循環などに関わる最近の助成研究一覧

(2005年)

国内の主な環境財団（独立行政法人、社団法人、公益信託等を含む）が助成（活動助成を含む）した研究課題の中から、水源（林）、里山、湧水、地下水、水循環、用水などに関わるものを選んで、取りまとめました。各法人名は「(財)公益法人協会 (<http://www.kohokyo.or.jp/>)」、「(財)助成財団センター (<http://www.jfc.or.jp/>)」のホームページ並びにYahooより検索しました。

また、その各法人の2006年1月時点でのホームページに公開されている中で、多摩川とその流域を中心に首都圏の主要な河川の環境保全のための調査や研究に携わる方々に参考となるとと思われるものを、当財団で任意に選択したものです。

| 研究課題 | 研究者 | 所属 | 助成法人 |
|---|------------------|--------------------------|-------------------|
| “多摩川大好き！みんなおいでよせせらぎ館” 多摩川体験活動プログラムの実施 | 長島 保 | NPO法人多摩川エコ ミュージアム代表理事 | 河川環境管理財団 |
| 源流らしい河川環境・源流景観形成と自然 学習・人材育成等 | 広瀬 文夫 | 小菅村村長 | 河川環境管理財団 |
| 自分で思いや願いが生きる多摩川での総合 的な学習 | 宮入 秀夫 | 府中市立四谷小学校 校長 | 河川環境管理財団 |
| 城山川調べ（城山川流域の動植物の生態観 測や調査、ポイントの水質検査） | 山本 誠 | 八王子市立城山小学校 校長 | 河川環境管理財団 |
| 多摩川における川遊び、学び、働く活動 | 竹村 伸二 | 大田区立嶺町小学校 校長 | 河川環境管理財団 |
| 多摩川流域「水辺の楽校」ネットワークづ くりと「子どもシンポジウム」の開催 | 横山 十四男 | 「狛江水辺の楽校」 運営協議会代表 | 河川環境管理財団 |
| 多摩川源流と中下流連携・交流事業と多摩 川源流大学モデル事業 | 中村 文明 | 多摩川源流研究所所長 | 河川環境管理財団 |
| 雨水の流出経路解析を導入した森林の水源 涵養機能の定量評価（2004年度） | 芳賀 弘和 | 山梨大学工学部 土木環境工学科 | クリタ水・環境科学 振興財団 |
| 世界で最長の渓流水中回帰移動をするナガ レタゴガエルから見た森林内渓流域生態系 の保全について（2004年度） | 三輪 時男 | 東京学芸大学 環境教育教室 | クリタ水・環境科学 振興財団 |
| 高密度に開発された大都市圏周辺の沿岸環 境の保全と持続的な再生 | 佐藤 慎司 | 東京工業大学大学院 社会理工学研究科教授 | 日本生命財団 |
| 野生動物との共存を図るための自然林・二 次林・人工林の価値評価にかかわる研究 | (財)科学教育研究会 | | 環境再生保全機構 |
| 水源レンジャーの育成による住民参加型流 域管理に向けたモデル作り | (特定)都市環境研究会 | | 環境再生保全機構 |
| 緑化による防災の道づくり・まちづくり～ 太平洋沿岸リレーシンポジウム | (特定)日本公開庭園機構 | | 環境再生保全機構 |
| 市民参加の里山生態系モニタリング調査の 実態と、調査方法の確立・普及 | (財)日本自然保護協会 | | 環境再生保全機構 |
| 水循環型社会を次世代に語り継ぐフォーラム | 流域の水循環社会をすすめる会 | | 環境再生保全機構 |
| 自然再生を促進する山・里・川・海の連携 保全再生事業 | 自然再生を推進する市民団体連絡会 | | 環境再生保全機構 |
| みんなで取り組む雑木林の再生 | 東大和市狭山緑地雑木林の会 | | 国土緑化推進機構 |

| 研究課題 | 所属 | 助成法人 |
|--|----------------------------|--------------------|
| 都市と農山漁村の共生・対流による循環持続型地域づくりの推進 | (財)農都共生全国協議会 | 国土緑化推進機構 |
| 森林と土壌の機能を活用した排水涵養・浄化システムに関する調査 | (財)造水促進センター | 国土緑化推進機構 |
| 森林整備における公共事業改革と地域森林管理の担い手に関する調査 | (財)林業経済研究所 | 国土緑化推進機構 |
| 山村資源の有効活用・地場産業の振興等山村地域活性化に関する調査 | 山菜文化研究会 | 国土緑化推進機構 |
| 林野所有構成の違いに着目した山村地域活性化に関する基礎調査 | 「森づくり」政策市民研究会 | 国土緑化推進機構 |
| 上下流連携による森林環境教育普及推進システム構築のための調査研究 | 東京農業大学 環境教育支援センター | 国土緑化推進機構 |
| 水源林の廃棄物投棄の実態と林道管理に関する調査研究 | (社)林道安全協会 | 国土緑化推進機構 |
| 森林の間伐が水源かん養機能に及ぼす影響調査 | 森林の間伐が水源かん養機能に及ぼす影響検討調査検討会 | 国土緑化推進機構 |
| 地域の創意に基づく新たな山村振興・森林資源活用のあり方に関する調査研究 | (財)林政総合調査研究所 | 国土緑化推進機構 |
| 水質や魚類の調査など浅川の実態調査により望ましい河川像を提案する活動 | 浅川流域市民フォーラム | セブン-イレブンみどりの基金 |
| 雑木林で多様な生態系を育むための帰化植物の除去や植生調査などの保全活動と広報活動 | 東久留米自然ふれあいボランティア | セブン-イレブンみどりの基金 |
| 街路樹の手入れと清掃により、CO2削減効果が高く清潔な歩道をつくる活動 | NPO 法人環境グリーンエイト | セブン-イレブンみどりの基金 |
| 空堀川の河川流域の景観の改善のための植花活動 | NPO 法人空堀川に清流を取り戻す会 | セブン-イレブンみどりの基金 |
| 環境学習講座の開催と「多摩市民による循環型くらしづくり」シンポジウムの開催 | 多摩市民環境会議 | セブン-イレブンみどりの基金 |
| 森林の水土保全能力や生物多様性の低下を引き起こす放置林の間伐に取り組む活動 | やまなし林業くらぶ | セブン-イレブンみどりの基金 |
| 多摩圏域における百年がかりの地域貢献活動 | 多摩さくら百年物語フォーラム | 日野自動車グリーンファンド |
| 多摩動物公園での里山保全及び普及活動 | 多摩丘陵の里山保全活動グループ | 日野自動車グリーンファンド |
| 野生動物アライグマの在来種への影響 | 日の出むじなクラブ生態班 | 日野自動車グリーンファンド |
| 日本産ホタル10種の生態と自然環境調査 | 板沢ホタル調査団 | 日野自動車グリーンファンド |
| 日野の用水路カルテづくりプロジェクト | 浅川勉強会 | 日野自動車グリーンファンド |
| 「川に学ぶ」活動助成(浅川)(2004年度) | 浅川流域市民フォーラム | リバーフロント整備センター |
| 「川に学ぶ」活動助成(浅川)(2004年度) | 日野市立滝合小学校 | リバーフロント整備センター |
| 「川に学ぶ」活動助成(多摩川)(2004年度) | かわさき水辺の楽校とどろき校 | リバーフロント整備センター |
| 「川に学ぶ」活動助成(多摩川・残堀川・府中用水・矢川)(2004年度) | 府中市立南白糸小学校PTA | リバーフロント整備センター |
| 「川に学ぶ」活動助成(小菅川)(2004年度) | 狛江水辺の楽校運営委員会 | リバーフロント整備センター |
| 水質・生物調査などワンドを活用した環境教育 | 滝合水辺の楽校運営委員会/PTA | (社)日本旅行業協会JATA環境基金 |
| 間伐材を利用したの人口森づくり体験 | 大田区立東六郷小学校PTA | (社)日本旅行業協会JATA環境基金 |
| サケ稚魚放流とホタル園の造成・飼育 | 町田市立鶴川第二小学校おやじの会 | (社)日本旅行業協会JATA環境基金 |

上記の掲載法人の URL 並びに上記に掲載はしていませんが、環境に関する調査・研究助成(活動助成含む)を行っている法人の URL をご紹介します。

| 環境に関する助成(活動助成含む) 法人名(掲載法人) | U R L |
|----------------------------|---|
| (財)河川環境管理財団 | http://www.kasen.or.jp/ |
| (財)リバーフロント整備センター | http://www.rfc.or.jp/ |
| (財)日本生命財団 | http://www.nihonseimei-zaidan.or.jp/ |
| (財)クリタ・水・環境科学振興財団 | http://www.kwef.or.jp/ |
| (独立行政法人)環境再生保全機構 | http://www.erca.go.jp/ |
| (社)国土緑化推進機構 | http://www.green.or.jp/ |
| (財)日野自動車グリーンファンド | http://www.hino.co.jp/j/corporate/newsrelease/pressrelease/detail.php?id=33 |
| (社)日本旅行業協会 JATA環境基金 | http://www.jata-net.or.jp/osusume/eco/ |
| セブン-イレブンみどりの基金 | http://www.7midori.org/midori/ |
| (未掲載法人) | |
| (財)「地球環境財団 | http://earthian.org/foundation/ |
| (財)イオン環境財団 | http://www.aeon.info/ef/ |
| (財)自然保護助成基金 | http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~pronat/ |
| (財)都市緑化基金 | http://www.urban-green.or.jp/ |
| (財)長尾自然環境財団 | http://www.jwrc.or.jp/NEF/ |
| (財)損保ジャパン環境財団 | http://www.sjef.org/ |
| (財)日立環境財団 | http://www.hitachi.co.jp/Int/skk/hsk15000.html |
| (財)サイサン環境保全基金 | http://www.h2.dion.ne.jp/~saisanec/ |
| (財)日本科学協会 | http://www.jss.or.jp/about/index.html |
| (財)日本財団 | http://www.nippon-foundation.or.jp/ |
| (財)トヨタ財団 | http://www.toyotafound.or.jp/ |
| (財)ハウジングアンドコミュニティ財団 | http://www.hc-zaidan.or.jp/topmenu.html |
| (財)昭和シェル石油環境研究助成財団 | http://www.showa-shell.co.jp/society/philanthropy/foundation/ |
| (財)鉄鋼業環境保全技術開発基金 | http://www8.ocn.ne.jp/~sept/ |
| WWF・日興グリーンインベスターズ基金 | http://www.wwf.or.jp/activity/enetwork/gifund/greeninvesters-list.htm |
| アムウェイ・ネーチャーセンター環境基金 | http://www.nature-center.org/fund.html |
| 日本経団連自然保護協議会 | http://www.keidanren.or.jp/kncf/ |
| (公益信託)富士フイルム・グリーンファンド | http://www.fujifilm.co.jp/corporate/environment/socialcontribution/greenfund/ |
| (公益信託)TaKaRaハーモニストファンド | http://www.takarashuzo.co.jp/ |
| (公益信託)むさしの緑の基金 | http://www2.musashinobank.co.jp/company/socially/environment/index.html |

順不同

5 2005年の多摩川関連の主な新聞記事

- 1月 3日-カナガワ-多摩川に桜並木スーパー堤防化工事を機会に川崎市川崎区の大師河原で実施へ
 12日-朝日-多摩川の源流域の解説書「多摩川源流絵図-奥多摩版」が完成
 17日-朝日-歩きたくなるみち500選に都内から13ヶ所選出-玉川上水のみちや野川のみちなど
 21日-読売-府中市の多摩川べりスポーツ施設が降雨で使用できず改善求める声が高まる
 24日-朝日-シンポジウム「多摩川水源地の森林砂漠化を考える」を「森づくりフォーラム」が開催
 25日-日経-都が多摩地域の活力再生の基本方針「多摩リーディングプロジェクト」を策定
 25日-カナガワ-多摩川の魅力を動画で楽しんで-川崎市がCDつきグラフを発行
- 2月 1日-朝日-国分寺市「真姿の池湧水群」近くのマンション建設工事が500万円の寄附金で和解(2/1日経/読売)
 3日-朝日-日本の滝百選のひとつ松原村の「払沢の滝」で結氷の美をみるイベント開催
 9日-読売-川崎市を拠点に活動する音楽デュオ「J&S陽だまりコンサート」が幻の歌「桜の多摩川」を復活
 17日-毎日(夕)-市町村合併で源流域は荒廃しないか不安-中村文明・多摩川源流研所長
 18日-ビジネスアイ-東京都松原村・都の奥座敷は自然の宝庫
 23日-朝日-青梅の里山を送電施設から守れ-アマチュアカメラマンがSOS写真展を開催
 28日-読売-多摩の乞田川でオオタカがコサギを鮮かに狩る-府中の佐々木さん撮影

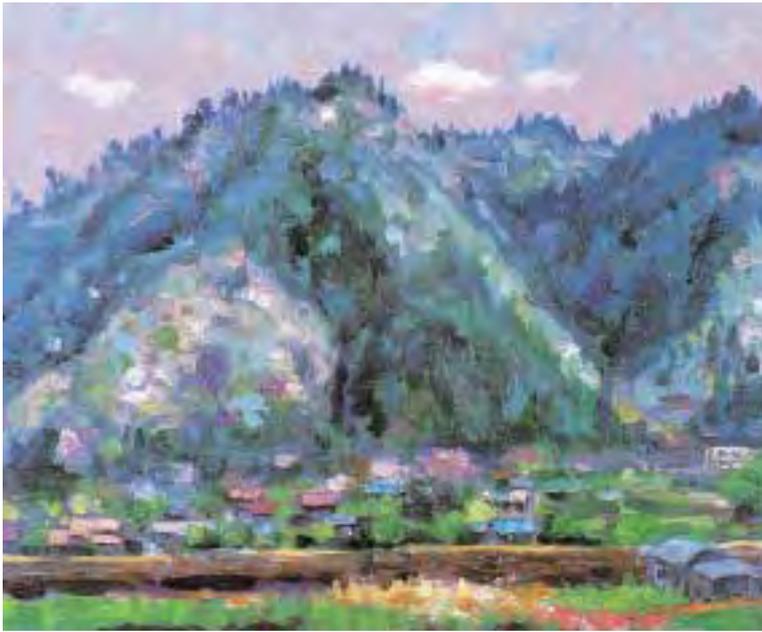
- 3月 1日-朝日-山林のシカ食害に悩む奥多摩町で「女将の会」がシカ肉料理を町の名物にと発表会
 1日-カナガワ-川崎市は市民にとっての母なる川「多摩川」の魅力発掘へ (3/1 読売)
 12日-毎日-多摩川や鶴見川に出没したアゴヒゲアザラシ「タマちゃん」の記録集が出版さる (3/13 カナガワ)
 13日-毎日-多摩川の支流・残堀川のコンクリート護岸にカワセミが営巣-普及進む生物配慮型護岸
 19日-読売-スニーカーをはいて・玉川上水は武蔵野の面影を残す沿道
 23日-読売-日野市立滝合小学校に「水辺の楽校」が完成-環境体験学習に利用
 23日-カナガワ-浮世絵展示の「砂子の里資料館」で多摩川をテーマにした浮世絵・木版画の展覧会
- 4月 5日-読売-木くずの再資源化が進み、ペレットを年間50t販売-都の森林事務所が中心で
 6日-読売-「多摩川の自然を守る会」などの環境団体が府中で交流会を計画
 6日-読売-たま巡り・大鷹の道(武蔵国分寺跡付近)-石仏たたくむ荘厳の世界
 6日-毎日-奥多摩町の森林被害の防止策で捕獲されたシカは166頭に
 8日-朝日(夕)-多摩川で稚アユの遡上が始まる-若アユがジャンプ (4/9 読売(夕))
 10日-毎日-昭島市大神町の昭和用水沿いに「水辺の散歩道」が完成-ホテル飛び交う場に
 11日-読売-荒廃した高尾山の国有林で日本山岳会会員らが200本の植樹
 11日-読売-国分寺市西恋ヶ窪の雑木林「エックス山」の植物ガイドをNPO法人が発行
 11日-毎日-羽村市の玉川上水取水口付近で春祭り-多摩川に胸までつかって神輿かつぎ
 12日-読売-景観保全プランづくりで昭島市が市民メンバーを募集
 13日-カナガワ-「浮き堰堤」を設計建設した平賀栄治は多摩川治水の功労者
 22日-朝日-都内で最も自然の質が高い里山「あきる野市横沢入地区」をJR東日本が都に譲渡
 22日-読売-青梅市の風景条例施行直前に東電がオオタカ生息地に電柱工事を敢行
 28日-毎日-高尾山が泣いている-立ち止まって考え直そう圏央道建設
- 5月 1日-毎日-うみ・やま・とうきょう-羽田沖浅場は貝が育つ楽園
 4日-カナガワ-若アユ遡上をお手伝い-多摩川調布取水堰の川崎側で市民がバケツリレー (5/9 カナガワ)
 7日-読売-都立校の改修工事には多摩産材を活用-今年度まず3校で実施
 9日-朝日(夕)-都は八王子裏高尾の都有林約11.7haの整備に向け募金を開始
 11日-カナガワ-里山歩いて緑地保全-多摩丘陵を歩く会が開発予定地の稲城南山を巡る
 14日-読売-都の名湧水57選のひとつ黒川清流公園(日野市)は心地よい里山
 14日-毎日-JR東日本が豊かな里山・あきる野市横沢入地区の41.3haを都へ無償譲渡
 18日-読売(夕)-奥多摩の森林へのシカの食害が集中発生-縦割り行政の弊害は江戸時代から
 19日-読売-東京湾の干潟に注目-生き物がいっぱい/全国の干潟は減る一方
 21日-朝日-あきる野市の里山、市民で守ろう-横沢入地区でオオブタクサ駆除の参加者募集 (5/26 読売)
 24日-毎日-たまの自然-日野市百草の丘陵地でわずかなわき水地帯にサワガニが生息
 26日-毎日-浅川・潤徳水辺の楽校推進協議会が賛同者を募集
 26日-カナガワ-国交省が多摩川河川敷の「ニヶ領せせらぎ館」など全国200の施設の活動をサポートへ
 31日-読売-アユの友釣りを秋川と多摩川で来月12日に解禁
 31日-毎日-6月1日~5日昭島でホテルの夕べ観賞会
- 6月 3日-読売-東京湾も含め88海湾の全てが要再検査-東京湾は水質など全ての項目で最低の評価
 3日-読売-水大賞・厚生労働大臣賞を「とうきょう環境浄化財団」が受賞
 4日-読売-福生市の初夏の風物詩「ほたる祭り」を開催-ゲンジボタルが飛び交う
 5日-読売-府中市の農工大FSセンターで「田んぼの学校`05」が開校-30人の親子が参加
 7日-毎日-たまの自然-浅川下流域の浅瀬でイソシギが鳴く
 9日-日経-東京で緑復活?-里山保護の第一号としてあきる野市横沢入地区を指定 (6/9 読売) (6/12 毎日)
 15日-読売-多摩川源流研究所の中村所長が講演-源流の自然は素晴らしい
 22日-カナガワ-田山花袋「多摩川右岸」-紀行文集で多摩川の景観を絶賛
 23日-日経-首都に生きる・江戸の環境を取り戻せ-「江戸前アユ」の本場多摩川の清流にアユ踊る
 23日-読売(夕)-絶滅危機にある渡り鳥「コアジサシ」を守れ-都の森ヶ崎水再生センター屋上を整備
 25日-カナガワ-水産庁が東京湾全域でフィールド調査へアオギス絶滅説の裏づけ調査
- 7月 5日-カナガワ-多摩川水害訴訟で住民側敗訴の2審判決を破棄した大堀誠一元最高裁判事逝く
 8日-読売-浅川が洪水予報指定河川に選ばれたのをうけ国交省「浸水想定区域図」を作成
 8日-朝日-都のレッドデータの希少種「モリアオガエル」が八王子檜原小の学習田で復活
 12日-毎日-農林業に被害を及ぼすシカ対策として、都が一般から意見を募集
 16日-カナガワ-多摩川河口域で小型タンカーが座礁-燃料油の漏れはなし
 19日-読売-NPO「多摩川エコ・ミュージアム」がせせらぎ館(川崎市宿河原)で人と魚の共生できる川づくりをめざす

- 7月 20日-カナガワ-130周年記念の社会貢献活動のひとつとして東芝グループ社員600人が多摩川河原を清掃
22日-朝日-私立和光小学校児童70人が総合学習「多摩川学習」で、奥多摩日原の巨樹を実物大に描く
22日-カナガワ-多摩川の魅力再発見-子供たちの自由研究に役だてよう
26日-毎日-奥多摩湖にかかる峰谷橋の色のぬりかえで都が自然公園法に違反
- 8月 1日-読売-川に親しみ、川を守る人に育てよう-浅川大橋-一帯で「ガサガサ探検隊」を開催
5日-朝日-海洋学会が多摩川河口部での環境アセスメントを要求/羽田空港拡張工事にまつた
5日-カナガワ-川崎市が多摩川水系の三沢川、二ヶ領用水、平瀬川を調査-環境基準を達成
6日-カナガワ-多摩川花火大会で汚れた河川敷を大勢のボランティアが清掃
10日-日経-多摩のいぶき・江戸潤した技を世界遺産に(玉川上水流域)
10日-読売(夕)-東京の散歩道・ホテルの命ともす-国分寺の湧水群
12日-読売-二子玉川・兵庫島での保育園児の水死事故で保育士を書類送検
14日-カナガワ-多摩川の自然を身近に感じよう-川崎市と多摩川エコミュージアム(NPO)がカヌー教室
16日-読売-多摩川のカワラノギクを守れ-明大や福生自然友の会などが除草ボランティア募集
19日-読売-多摩川源流の魅力を語る-中村源流研所長が多摩川の大切さを解説
26日-カナガワ-国交省が羽田空港拡張で「環境への影響は小さい」とのアセスメント結果を公表
- 9月 5日-朝日-クリーン河川敷・1万3千人の市民が浅川をクリーンアップ
7日-カナガワ-川崎市の産業観光振興計画・多摩川の水バスも視野に
13日-カナガワ-多摩川の未来を皆で描こう・川崎市が講演会とサロンを開催
14日-毎日-シカの食害から水源林170km²を守る為に生息数の管理を強化へ(9/18読売)(9/21朝日)
28日-読売-多摩川を学びの場とする「水辺の楽校」9校が共同で新聞「たまっ子」を創刊
- 10月 10日-読売-「山を救え」植林に汗-高尾の森づくりの会代表河西さん
13日-朝日-カワラノギクが開花-はむら自然友の会が保護・育成(10/21読売も)(10/26毎日も)
13日-朝日-カブトムシの木を切らないで-調布市若葉町の住民が反対
20日-カナガワ-NPO法人「かわさき自然調査団」がカナガワ地域社会事業賞を受賞
20日-朝日-森林荒廃防止に多摩産材カレンダーを製造販売-たまおこしの会(国分寺市)
23日-カナガワ-「父と子の多摩川探検隊」(平凡社1680円)出版さる
24日-読売-ひと十文路「写談・撮んぼ」会長の石川孝さん-多摩川源流美を追う
- 11月 5日-朝日-奥多摩の森の今を学ぶシンポジウムを法大が市ヶ谷キャンパスで開催
7日-カナガワ-俳優の中本賢さんが多摩川の魅力を語る
9日-読売-たま巡り-奥多摩むかし道/今も続く「絵画の世界」
20日-カナガワ-市民で語ろう「多摩川の将来」/川崎市が第1回サロンを開催
23日-読売-「玉川上水」の清流を新宿御苑に復活/環境省と新宿区が協力
24日-毎日-「里山で学ぼう」/世田谷区成城3丁目緑地で農大とトラスト協会が主催
26日-読売-青梅「美しい風景を育む条例」で専門家集団が現地調査を開始
27日-カナガワ-宮前区の私立大蔵小学校で、同校のビオトープにカワナニとホテルの幼虫を放流
27日-読売-日野市で環境市民会議が発足
29日-カナガワ-川崎市の「二ヶ領用水(宿原原線)」が国交省の「手づくり郷土賞」を受賞
30日-毎日-横沢入地区(あきる野市)を都内初の里山保全地域にと答申
- 12月 1日-読売-多摩の緑の保全に協力を一都が「民間サポート」を募集
6日-毎日-多摩川で産卵場造成-都が「江戸前アユ」復活へ
8日-カナガワ-川崎市中原区の魚瀬川(多摩川河川内の小川)で水生生物の“避難”支援
8日-日経-都が川魚復活作戦-「奥多摩やまめ」、「江戸前アユ」など
8日-読売-あきる野市横沢入の湿地復元作業の参加者募集
9日-朝日-多摩地域9市民が多摩川・玉川上水都市農業などについて来年1月13日にサミット開催(12/13日経)
14日-日経-住宅に多摩の木材を-金融機関と連携(12/22読売も)
17日-日経-あきる野市横沢入地区を自然体験の場として里山保全地域に指定
21日-読売-多摩川を舞台に東京学芸大が講演会-環境、地域社会を学ぶ
24日-カナガワ-年末を迎え、大師橋もライトアップ
25日-朝日-多摩川と秋川の合流地点でハクチョウ14羽が目撃される
28日-毎日-東京ボランティア奮闘記-横沢入里山管理市民協議会
28日-読売-「新多摩川物語」の挿絵原画版が八王子市で開催さる
31日-カナガワ-「多摩川に虹をかけた男-田中兵庫物語」が川崎市内で'06年1月から上演へ

6 多摩川流域で活動しているNPO法人、任意団体等一覧

多摩川流域には環境保全等で活動している団体（NPO法人、任意団体等）が200団体以上あると言われています。当財団で研究助成した団体、本誌（財団だより「多摩川」）を送付している団体等、当財団と関係が深いと思われる団体をご紹介します。

| NPO法人・任意団体名 | U R L |
|-------------------|---|
| NPO法人 多摩川センター | http://www2.ttcn.ne.jp/~tamagawa/ |
| NPO法人 多摩川エコミュージアム | http://www.seseragikan.com/ |
| NPO法人 海辺つくり研究会 | http://homepage2.nifty.com/umibeken/ |
| NPO法人 グリーンネックレス | http://www.green-necklace.org/ |
| NPO法人 森づくりフォーラム | http://www.moridukuri.jp/top_event.htm |
| NPO法人 環境学習研究会 | http://www.ecok.jp/ |
| NPO法人 全国水環境交流会 | http://www.mizukan.or.jp/ |
| (財)たましん地域文化財団 | http://www.tamashin.or.jp/ |
| (財)せたがやトラスト協会 | http://www.setagayatrust.or.jp/ |
| (財)東京都市町村自治調査会 | http://www.tama-100.or.jp/tama/index.html |
| 多摩川源流研究所 | http://www.tamagawagenryu.net/ |
| 東京都奥多摩ビジターセンター | http://www13.ocn.ne.jp/~okutamav/ |
| 多摩川流域リバーミュージアム | http://www.tamariver.net/index.htm |
| みずとみどり研究会 | http://www.geocities.co.jp/NatureLand/3029/index.html |
| 多摩川と語る会 | http://www.smnpo.gr.jp/npodata/kanto/kt16.html |
| 狛江水辺の楽校 | http://www6.ocn.ne.jp/~yamaguri/ |
| とどろき水辺の楽校 | http://www001.upp.so-net.ne.jp/motoori/mizube/top.html |
| かわさき水辺の楽校 | http://www.keihin.ktr.mlit.go.jp/tama/study/school/kawasaki.htm |
| あきしま水辺の楽校 | http://www.keihin.ktr.mlit.go.jp/tama/study/school/akishima.htm |
| 多摩川癒しの会 | http://home.m03.itscom.net/iyashi/right2.htm |
| 多摩川・リバーシップの会 | http://b-flag.com/river-ship/index_up.html |
| 多摩川の自然を守る会 | http://homepage2.nifty.com/tamagawa/index.html |
| 多摩川サケの会 | http://www.geocities.co.jp/NatureLand-Sky/2024/act.html |
| 多摩川環境研究会 | http://www.nposhien.net/abt/org/orgpage/d0002.shtml |
| ATT流域研究所 | http://kankyou1.hp.infoseek.co.jp/att/ |
| 実践生物教育研究会 | http://www004.upp.so-net.ne.jp/jissen/ |
| 八王子・日野カワセミ会 | http://kawasemi.fan-site.net/ |
| 西多摩自然フォーラム | http://www.ntforum.org/index.html |
| ラブリバー多摩川を愛する会 | http://loveriver.ne.jp/ |
| 玉川上水ネット | http://www.parkcity.ne.jp/~tama-net/ |
| せたがやグリーンマップ | http://sgmap.org/ |
| 三鷹環境市民連 | http://www.parkcity.ne.jp/~siminren/index.htm |



「高尾山の春」

画家 川月泉鑑
かわつきいずみ

昭和8年生まれ
中央美術学園卒業、武蔵野美術大学中退
国際青年美術家展、中央美術協会展、
ルサロン、ナショナルデボザール等出品
個展50回
日本美術家連盟会員、'82会創立会員
八王子市在住

ご協力：財団法人 たましん地域文化財団

▶ 当財団の概要 (2005年12月31日現在)

設立 1974年8月28日
 特定公益増進法人認定 (2004年11月更新)
 主務官庁 経済産業省
 基本財産 974百万円
 財源 基本財産等の運用収入
 並びに寄付金

事業内容 研究助成事業
 1 研究助成 総助成件数 452件
 総助成金額 1,184百万円
 2 学習支援 など
 副読本制作配布 195千部
 データブック配布 5千部

印刷刊行物 研究助成成果報告書学術編
 研究助成成果報告書一般編
 財団だより(季刊) 3,000部
 環境副読本(毎年) 10,000部

助成研究選考委員会委員長 高橋 裕
 東京大学名誉教授(河川工学専攻)

[理事] 安藝哲郎 東急不動産株式会社 取締役相談役
 飯田亮 セコム株式会社 取締役最高顧問
 池島政弘 亜細亜大学 学長
 石橋正男 西武鉄道株式会社 取締役副社長
 稲葉興作 日本商工会議所 名誉会頭
 條清文 東京急行電鉄株式会社 取締役会長
 北中誠 小田急電鉄株式会社 前取締役相談役
 小長啓一 AOCホールディングス株式会社 相談役
 小沼通二 学校法人 五島育英会 前顧問
 三枝正幸 京王電鉄株式会社 取締役会長
 櫻井孝穎 第一生命保険相互会社 取締役相談役
 中村英夫 武蔵工業大学 学長
 平松一朗 京浜急行電鉄株式会社 取締役相談役
 [常務理事] 長井弘道 (財)とうきゅう環境浄化財団事務局長
 [監事] 中山川幸次 財団法人 世界平和研究所 副会長
 山田匡通 東京急行電鉄株式会社 常勤監査役
 [評議員] 井原國芳 東急建設株式会社 特別顧問
 越村敏昭 東京急行電鉄株式会社 取締役社長
 塚孝夫 東横学園女子短期大学 学長
 佐室有志 株式会社 日立製作所 名誉顧問
 篠原三代平 財団法人統計研究会 会長
 蛇川忠暉 日野自動車株式会社 取締役会長
 高木利武 株式会社 東芝 専務取締役
 高梨昌芳 横浜商工会議所 会頭
 高橋信裕 東京大学 名誉教授
 高鳥井信吾 サントリー株式会社 取締役副社長
 長澤明彦 川崎商工会議所 会頭
 福原義春 株式会社 資生堂 名誉会長
 藤嶋昭 (財)神奈川科学技術アカデミー理事長
 水田寛和 株式会社 東急百貨店 取締役社長
 諸江明彦 キヤノン株式会社 常務取締役
 山口裕啓 学校法人 五島育英会 理事長

▶ 役員・評議員

(敬称略50音順)

[会長] 清水 仁 東京急行電鉄株式会社 取締役相談役
 [理事長] 五島 哲 東京急行電鉄株式会社 取締役調査役

- 発行日 平成18年3月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
 〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14
 (渋谷地下鉄ビル内)
 TEL (03)3400-9142
 FAX (03)3400-9141
 ホームページ <http://home.q07.itscom.net/tokyuenv>

